

寄稿

理工系大学生のための日本語教育におけるチャレンジ

—中国大連理工大学日本語強化班の事例—

李 篠平

大連理工大学外国語学院 116—024 大連市凌工路 2 号

E-mail : lixp6 @online. ln. cn

A challenge of Japanese Education for the students of Science and Technology

A Case of Japanese strengthening Course at Dalian University of Technology

LI Xiaoping

School of foreign languages, Dalian University of Technology

116-024 Dalian 凌工路 of No. 2

外国との交流が、IT 産業、電子情報産業、ハイテク産業などハイレベルの先端産業に拡大し、質的な交流段階に入りつつある中国において、国際交流の中心的役割を担う人材、つまり高度な外国語能力と専門知識を持った複合型人材の養成は地域社会の経済成長の中で新しい課題として提起されている。本報告では理工系専門知識、貿易経済の常識並びに高度な外国語能力を同時に備えた複合型人材の養成を試みる中国大連理工大学機械工学部日本語強化班の実践を手がかりに日本語教育の新しいチャレンジと課題を整理して論じようとするものである。

キーワード： 日本語教育、強化班、理工系学生、複合型人材、日本語専攻

1. 報告の課題

2001 年末の WTO への加盟は中国社会に新しい挑戦と契機をもたらしてきた。対外開放政策の実施が具体化され、海外との交流分野がますます拡大されつつある中、対外開放の先端都市である大連市は、外国との交流が、IT 産業、電子情報産業、ハイテク産業などのハイレベルの先

端産業まで及び、質的な交流段階に入りつつある。一つの例をあげてみると、国家 IT ソフト開発重点都市としての大連市は 2003 年度後半、大連市 IT ソフト開発パークに定着した外資企業が 100 件を超えている。内 4 割以上の企業は日本企業である¹⁾。なお、実質経済成長率が約 10% という高度成長を続けている現在の中国はこれからの発展も期待され、海外からの投資および様々な分野で

の交流がますます幅広く展開していくと予測される。その交流の中心的役割を担う人材、つまり専門知識と高度な外国語能力を備えた複合型人材が求められている。

ところが、これまでの人材養成のパターンとして、外国語専攻の学生は文系の知識だけ学び、理工系専攻の学生は理工系だけのものを学ぶという単一型人材養成が主であった。それゆえ、外国語専攻の卒業生は理工系関係の仕事に携わることが困難であり、逆に理工系の卒業生は外国語を併用するような職業に就くことができないという状態が長く続いていた。一方では理工系専門知識、貿易経済の常識並びに高度な外国語能力を一体に備えた複合型人材の養成が、地域社会の経済成長の中で新しい課題として提起されている。

この課題に答えるために他に先立ってチャレンジを試

みたのが中国大連理工大学機械工学部の実践である。

本報告は大連理工大学機械工学部日本語強化班の実践を手がかりに日本語教育の新しいチャレンジと課題を整理して論じようとするものである。

2. 日本語強化班の概要

2. 1 日本語授業の編成

1987年8月に大連理工大学機械工程学院は、他に先立って機械製品の設計・製造、技術開発と応用、機械電気貿易・管理経営領域におけるハイクラスエンジニア養成を目的として機械設計製造・自動化専攻に日本語強化班を設置した。外国語、機械専門知識並びに貿易知識を三位一体にし、多機能、複合人材の養成を狙いとした。学制は5年とし、卒業後、専門日本語学士と機械・対外貿易学士という2つの学位を獲得することがこの専攻のメリットである。学生は全国大学統一試験で高い点数を獲得し、高度の英語運用能力を有する高校卒業生に限る。

日本語強化班という名称は、日本語専攻や第一外国語としての日本語教育と区別するために新たに作られたものである。まず、日本語専攻の場合にはカリキュラムの中心は日本語であり、4年間にわたって主に学習する科目は日本語及び日本関係の知識である。それに対して、日本語強化班では日本語授業はカリキュラムの中の一部(1/3)だけで、機械設計製造と貿易経済関係の授業がメインの授業とされるところに違いがある。次に第一外国語としての日本語教育では日本語授業は専ら必修科目の一科目に過ぎないが、それに対して、日本語強化班では日本語の授業はカリキュラムの1/3くらいを占め、1年目の主な授業が日本語であるところに違いがある。そこでゼロからスタートする日本語の授業は1年目に集中的に学習させることはもちろんのこと、後の4年間もその学習を続けさせるという点が強化ということばを使ったゆえんである。

強化班の日本語教育は1年目に、週に20校時(1校時45分、実時間15時間)の日本語の授業が設置され、「読解」、「会話」、「聴力」という3科目の授業を並行する(表1参照)。授業時数は全学年でトータル578学校時間である²⁾。2年目の日本語の授業科目は1年目と同じ3科目で進むが、校時は1年目の578校時より60校時減らし518校時となる。代わりに中国人教師の日本語による機械専攻授業を1科目96校時と英語の授業240校時を併設する。3年目になると日本語の授業科目は「会話」と「聴力」だけとなり、授業時間も284校時と激減する。代わりに中国人教師の日本語による機械専攻の授業を1科目96校時

と英語の授業を1科目240校時増やす。4年目になると、日本語の授業は「選読と作文」のみで、136校時となる。代わりに中国人教師の日本語による機械専攻の授業を3科目、126校時、英語の授業を1科目24校時、貿易関係の授業を2科目増設する。5年目は最後の年次であり、就職活動などのことも考慮し、「日本語上級会話」の授業を増設し、授業時間も前年度の136校時から265校時に増やす。

2. 2 課外活動による応用能力の養成

表1に示したように日本語専攻の授業は5年間でトータル4科目、106単位、1,782校時である。これは一般の日本語専攻のそれに比べて、いずれも少ないということは言うまでも無い。その不足を補い、応用能力を育てるために、授業外にも様々な課外活動を展開している。

まずは学生の自主活動として「日本語コーナー」、「日本音楽・演劇」、「日本語弁論」、「日本名作鑑賞」などの課外活動グループを作っている。活動組織の仕組み、活動形式、活動内容および活動時間などは全面的に学生の自主性に任せて進めており、教師はバックアップするにとどまる。同時に日本人の教師や学内の日本人留学生も積極的に参加できるよう工夫し、活動しやすい環境を作って、互いの積極的な交流を促進している。第二は日本人留学生との友達作りの運動を展開させることである。日本語で交流することを活かし日本人留学生の日常生活における問題や困難に対する助言、手助けなどを通じて、互いに友情を育み、相互の交流を深めることをはかる。

第三は教材の内容にあわせて、演劇や発表など、日本語で話す機会を増やすことである。例えば授業が始まる前の数分間を利用して、発表をさせる。発表のテーマは計画的なものであるが、内容は自由形式、指定形式などの形を取っている。また、2年目の前半、「鶴の恩返し」という文章を習うが、それをきっかけに学生に、ステージに立って寸劇を演じさせる。学生たちは教材の内容を変えたり、「新しい鶴の恩返し」の脚本を作ったりして、道具や衣装をあわせて出演することを通じて日本語への興味を深め、日本語能力の向上に努める。学生を奨励するために審査委員会を作って、賞品や賞状などを授与する。この企画は充実した楽しい授業として評価されている。

表1 強化班日本語授業カリキュラム³⁾

学年	授業名	科目属性	単位数 (1学期)	総校時数	テスト形態
1年目	日本語読解(1)	必修	8	92	試験
	日本語会話(1)	必修	6	72	試験
	日本語視聴(1)	必修	6	72	試験
	日本語読解(2)	必修	8	152	試験
	日本語会話(2)	必修	6	114	試験
	日本語視聴(2)	必修	4	76	試験
2年目	日本語読解(3)	必修	6	108	試験
	日本語会話(3)	必修	4	72	試験
	日本語視聴(3)	必修	4	72	試験
	日本語読解(4)	必修	6	114	試験
	日本語会話(4)	必修	4	76	試験
	日本語視聴(4)	必修	4	76	試験
	画法幾何と製図	必修	6	96	試験
3年目	日本語会話(5)	必修	4	72	試験
	日本語視聴(5)	必修	4	72	試験
	画法幾何と製図	必修	6	96	レポート
	日本語会話(6)	必修	4	72	試験
	日本語視聴(6)	必修	4	68	試験
4年目	選読と作文(1)	必修	4	72	試験
	機械加工工学基礎	必修	1.5	24	レポート
	機械設計基礎	必修	4	64	試験
	選読と作文(2)	必修	4	64	試験
	制御工程基礎	限選	2	38	レポート
5年目	日本語会話(7)	必修	4	76	試験
	選読と作文(3)	必修	4	76	試験
	機械製造自動化技術	限選	2	32	レポート
	機電一体化システム設計	限選	2	32	レポート
	日本語会話(8)	必修	4	56	試験
	選読と作文(4)	必修	4	56	試験

注：■を付した授業は日本語学科外の授業であり、日本語によって行われる。

第四は公開講座を開き、学生に日本語に関する情報や視野の拡大の機会を提供する。外国語学部は大体 2 週間に 1 回公開講座を開いている。講師の先生にはほとんど日本人を招き、日本文化、学生の関心事などについて講演をしていただく。講座の受講は、単位の取得につながり、4 回講座を受講すると 0.5 単位が与えられる。公開講座は強化班の学生にとって生の日本を知る絶好のチャンスであり、積極的に参加している。たとえば、今年の春に「いけばな」講座を開いたが、講演室は学生で溢れていた。講演の後、学生にもいけばな体験をさせ好評を博した。

第五はスピーチコンテストや作文コンクールなどにチャレンジさせることである。大連市人民対外友好協会と大連市日本キャノン大連事務機有限会社主催の「大連市キャノン杯日本語弁論大会」は 1990 年から年に一回行なわれてきた。また日本国際交流研究所大森和夫所長主催の「中国大学生・院生日本語作文コンクール」が 1993 年から年に 1 回中国で行なわれている。このような日本語実践活動になるべく積極的に参加するよう勧め、日本語の応用能力の向上をはかっている。

第六は休みを利用して日本人旅行団体、日本企業などの交流を展開することである。例えば夏休みを利用して日本人旅行ツアーを接待させたりする。

2. 3 これまでの実績について

日本語強化班は 1987 年にスタートし、1992 年から卒業生を出して 2003 年現在まで全 11 期の卒業生を送りだした。学生たちは機械専門知識の外に日本語能力を有するおかげで、さまざまな場で活躍し、輝かしい実績を収めた学生も少なくない。

まず日本国際教育協会・国際交流基金主催による日本語能力試験の場においてである。1991 年以降の実績をみると、日本語強化班の日本語能力試験の合格率は 98% を上回っている。1988 年入学の 2 期生を例にとると、34 名の受験者（クラス全員）全員が合格した上に、最高得点が 386 点、平均点数が 358.2 点という結果であった。当年度における大連地域 239 名の受験者のうち、日本語強化班は 3、4、7、8、9 位の順位を獲得し、半数以上の学生が 20 位以内に入ったという輝かしい成績を収めた⁴⁾。次は上述した「大連市キャノン杯日本語弁論大会」の場

においてである。この大会は開催して今年で 14 回目を迎えたが、日本語強化班の学生がこれまで参加した 13 回の内、金メダルを獲得したものは 7 人、銀メダルは 9 人、銅メダルは 10 人という実績を作った。「日本語作文コンクール」は第 3 回目から参加し始めたが、これまで 7 つの 3 等賞と 6 つの優秀賞を獲得した⁵⁾。

中でも最も高く評価されているのは社会人としての日本語強化班卒業生だと言わなければならない。1992 年 7 月から日本語強化班の卒業生は社会に出して今年で 11 年目を迎えている⁶⁾。第一期卒業生から今年まで、続けて 100% の就職率を保っている。卒業の数ヶ月前から全国から人材募集にやってくる。就職先は国家大手企業から対外貿易機関、日本企業などの幅広い分野にまで及んでいる。機械専攻の上に日本語能力を有するおかげで、社会に出ると、様々な職場でこれまで蓄積した知識、才能を活かし、重要任務を担う者がかなりいる。就職先からよい知らせが次々と伝わってくる。例えば、一期生の Y は就職してからまもなく職場長になった。R は外国と技術交渉を担当した際、専門知識と高度な日本語をうまく使いこなせたために、企業の 7 億円の損失を回避させたという。また、通訳とエンジニアはこれまで二人分の仕事だったが、今は一人で担うことができるおかげで、以前より更に仕事を円滑に進めることができ、作業効率と質の向上につながった。強化班の卒業生が携さった技術交渉プロジェクトは成功率が高いと評価されているのはその証しだといえよう。

これまでに輩出した、全 11 期、700 人ほどの強化班卒業生は中日両国の各分野で活躍し、高い評判を得てきた。特に 2、3 年前から日本国内企業が直接に人材採用に来るようになった。中には卒業する 2、3ヶ月前から学業を続けながら内定企業に勤めた学生が 4 分の 1 ほどもいる。

3. 日本語強化班の特徴

大学側、機械工学部側からの特別配慮、学生の質、学習意欲などが関わるのはもちろんのこと、適切なカリキュラムと確実な実施策も強化班を特徴付ける重要な一面であることも否定できないだろう。表 2 は大連市内の 3 つの大学の日本語関係授業の配置状況の比較表である。

日本語専攻に比べると、強化班の学生はゼロから始まり、日本語授業は少ない代わりに機械専門の授業が圧倒的に多いことが特徴である。これらの特徴が実現した理

表2 強化班と日本語専攻における課程配置対照表⁷⁾

大学名 項目	大連理工大学日本語強化班		大連市内A 大学	大連市内B 大学
	強化班	備考		
学 制	5年		4年	4年
入学点数ライン	580点		490点	526
日本語学習歴	無し		1割	1割
クラス平均人数	23	最少人数	45	25
日本語授業総科目	4	最少	26	24
日本語授業総校時	1782	中	2412	1533
英語授業総校時	300	最多	288	200
外国語以外の授業 総 校 時	2658	圧倒的多	742	1141
合計校時	4740	圧倒的多	3442	2874

由として、次のものを挙げる事が出来よう。

- 1) 学習の内容は、教材と課外活動によりなるべく実用的な知識を身に付けさせることに努める。これまで使った教材⁸⁾はやや難しいものであったが、多くの課外活動を設けて教材の内容を十分に消化し使いこなす機会を加えた。
- 2) 教師の合理的な組み合わせによる。強化班の日本語授業は中国人教師と日本人教師が担当している。「会話」や「作文」のような授業はなるべく日本人の教師が担当し、「精読」や「翻訳」の授業は中国人教師が担当する。両方の長所を活かしながら協力することによって学生の学習意欲を引き出し、潜在能力を伸ばす。
- 3) 教室に限らず、課外での実践学習を重要視する。上述した部活の展開のほか、ビデオ鑑賞、スピーチコンテストの参加、休み期間内の実践活動の展開などがそれである。
- 4) 機械専門の授業とうまく組み合わせる。日本語学習の進度に合わせて、適切に中国人教師の日本語による機械専門授業を加えるなどしている。それによって一石二鳥の効果が得られる。

もちろん、強化班は一つの新しいチャレンジとして試行錯誤を重ねながら進行しており、不十分なところ

や改善すべきところが多々あるということは否定できない。

4. おわりに

以上、大連理工大学機械工学部日本語強化班の概要について考察してきた。地域社会の発展、広範囲でハイレベルな交流を実現するために作った日本語強化班は、全11期の卒業生の職場での努力ぶりを見ても、国、地域社会の経済発展および中日交流の推進に確実に貢献していることが分かった。このような貢献は今日に限らず、将来的にも計り知れない可能性を秘めた有意義なチャレンジだと言えるだろう。

もちろん、初歩的段階の実験として、様々な不備が存在しているのは事実であるが、新しい創造と大胆な試みであるところに日本語強化班の画期的な意味がある。

今後の課題としては、カリキュラムの編成における日本語以外の授業とのバランスの問題、各学年の日本語授業の合理的配置および教材選択に関わる問題など、あらためて詳細に検討してみたい。

注

- 1) 夏徳仁：夏徳仁市長作客新浪就我市市人事人材話談，大連人事編制ネット，2003.10.6

- 2) 理工大学では1 学校時間は45分とされている。
- 3) 大連理工大学2003 年度シラバス p163 によって作成。
- 4) 白元昌・神谷純子, 日本語教育のひとつの試み, 西安日本語教育国際シンポジウム, 1993 年8 月
- 5) 大連理工大学大学もと日本語教研室主任白元昌教授へのインタビューによる。
- 6) 1990 年～1991 年は教官数不十分のため、募集しなかった。
- 7) 表2 は、大連理工大学2003 年度シラバス、大連B 大学日本語学科F 助教授への事情聴取と大連A 大学2001 年度シラバ

スによって作成。

- 8) 谷学謙等：新編日語, 吉林教育出版社, 1986 年12 月

著者紹介

李篠平：大連理工大学外国語学院助教授【経歴】1983 年大連外国語学院日本語学部卒、1996 年山形大学教育学部修士課程修了 修士（教育学）、2001 年東北大学教育学部博士課程修了 博士（教育学）

英語要旨

At present in China, talents with both professional knowledge and a high level of foreign language proficiency are playing a leading role in the economic construction of the country. As a result, the cultivation of this kind of talents has become an important project for a country in its economic development and international cooperation. Such project, as a new industry just like the IT industry and the electronics information industry, is going to be raised to a qualitatively higher stage.

This paper discusses the practice of a syllabus undertaken at the Mechanical Engineering Department in Dalian University of Technology for the purpose of cultivating these talents. The students are required to take courses of advanced Japanese language, the basic knowledge of commerce and economics, as well as courses on their major specialty in mechanical engineering. The key point in the discussion is how to take the challenge of fortifying the student's Japanese capability with a satisfactory efficiency.